



浄瑠璃・時代物 「けいせい反魂香」

◎初演 宝永五（一七〇八）年 竹本座

「しつかりものの女房はいかにして亭主を助けるか」

あらすじ

絵師狩野元信は敦賀に下り、遊女遠山（実は絵師土佐将監光信の娘）

と出会い、夫婦の約束をする。元信は、近江国の六角家に仕えるが、姫君銀杏の前

と祝言をあげるはめとなる。それを見た悪臣不破伴左衛門らが難癖をつけ、元信を

捕らえる。元信は自分の肩をかんで、血を襖戸に吹きかけ、虎を描く。この虎は生

きて暴れだし、元信を助け出す。虎は京都山科に蟄居している土佐将監

光信の住まいの辺りに現れるが、土佐の名字が許された光信の弟子修理介

は、筆でその虎をかき消す。修理介の兄弟子、浮世又平も、光信から土佐

の名乗りを許してもらおうと、妻と師匠光信を訪ねる毎日だが、ものを言

うのが不自由なこともあり、光信はそれを許さない。絶望した又平は、庭

の手水鉢に自分の姿を書き残して自害しようとするが、手水鉢の裏側に

その絵が浮き出る。その功により名を許され、土佐又平光起と名乗る(上之巻)。

京六条の廓くわで、六角家の名古屋山三なごやさんざは、元信のため伴左衛門を討つ。廓に現れた元信は、みやと名を変えた遠山と再会するが、「山三への義理のため、銀杏の前の結婚を断れない」と言う。元信を思い切れないみやは、銀杏の前に頼み、元信としばしの間、夫婦となる。が、それは不思議な香の力によって現れたみやの亡霊だった。みやは元信に別れを告げ、消え入る(中之巻)。

出世した元信は、光信に蟄居が解かれたことを知らせに来る。銀杏の前に遠山の姿をさせ、将監光信の娘として元信に嫁がせる(下之巻)。

見どころ 題名に採られた「反魂香」とは、死者の魂を呼び返し、その姿が煙の中に現れるという中国の故事に出てくるお香のことです。死んだ後も、元信を思うみやのひたむきな愛情が、この作の最大のテーマです。現行の上演では、元信もみやも出てこない上之巻の「土佐将監閑居の場」のみが演じられますが、近松の人気作の一つです。後輩に先を越され死まで覚悟する又平の悲哀と、幕切れのどんでん返しですが、一幕の舞台として魅力的だからでしょう。とりわけ、おしゃべりで夫を助けるしつかりものの妻が示す深い情愛が、観客の胸を打ちます。